

茨城大学学報

第324号

平成27年12月～平成28年1月



雪のキャンパス

INDEX

- ◆ 犯罪・交通事故の防止へ向けた緊急対策を実施
- ◆ 第11回学生国際会議を開催
- ◆ キャンパス周辺自治会とともに町内一斉清掃
- ◆ 職員採用内定通知書交付式を実施
- ◆ 学長、事務局長がベトナム・ハノイを訪問 日越大学関連式典に参加
- ◆ 防災防火訓練を実施
- ◆ 水戸市との共催でキャリアワーク・ライフ・バランス語るセミナー
- ◆ 教員2名が科学研究費助成事業（科研費）審査員表彰
- ◆ 茨城大学美術家教員展をひたちなか市内で開催 新たな試みも
- ◆ 平成28年 三村信男学長年頭あいさつ
- ◆ 仏漫画バンド・デシネ人気作家のアジア初の個展を学生の運営で開催
- ◆ 附属中・小沼信行 主幹教諭、文部科学大臣優秀教職員表彰を受賞
- ◆ OB・OGの若手記者招き地方新聞について語るシンポジウム
- ◆ タイ、ベトナムとの大学間合同ワークショップを開催
- ◆ 大学改革キャッチフレーズを学内募集で多数の応募

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 犯罪・交通事故の防止へ向けた緊急対策を実施
女子学生全員への防犯ブザー配付、県警と連携した防犯講習会など

茨城大学では、学生が巻き込まれる犯罪や交通事故が本学周辺にて多発していることを受け、「学生を守る！緊急対策」として、女子学生全員への防犯ブザーの配付や、警察との連携による防犯講習会など、防犯・交通事故防止に向けた取り組みの強化を始めました。

本学のキャンパス（水戸・日立・阿見）周辺においては、ここ数ヶ月の間、「路上で持ち物を強奪された」「留守中のアパートへ侵入された」「夜間に不審者から自動車に乗るよう声をかけられた」「帰宅中につきまとわれた」など、学生の身の安全が脅かされる事件が頻発しているとともに、バイク、自転車等による交通事故も多く発生しています。

こうした事態を受けた緊急対策として、12月1日（火）、学長から全学生に向けて「学生安全確保のための緊急メッセージ」を発表するとともに、女子学生全員に対する防犯ブザーの配付を決定しました。また、12月16日（水）には、水戸警察署の方を講師に招き、女子学生を対象とした防犯講習会を実施しました。そのほか、防犯、交通安全のパンフレットやハザードマップの配付、学生に関する事件・交通事故事例の周知など、防犯・交通事故防止のための啓発・情報共有を強化します。さらに、各キャンパスの防犯カメラの増設や学内外の夜間照明の改善など、安全確保のための環境整備を推進します。



茨城大学 三村 信男 学長と
水戸警察署の上原 眞佐樹 署長



水戸警察署による防犯・交通事故防止講習会

学生安全確保のための緊急メッセージ（在学生向け）

平成 27 年 12 月 1 日
茨城大学長 三村 信男

昨今、本学学生の身の安全が脅かされる事件や交通事故等が頻発しています。

本学周辺において、夜間に不審な外国人から自動車に乗るよう声を掛けられた、夜間帰宅中に自動車につきまとわれた、また、早朝、路上で強盗に襲われ持ち物を奪われた、留守中にアパート 2 階へ侵入されたなど、実際に被害を受けた事例がたびたび報告されています。過去には、本学の女子学生が夜間に一人で外出し事件に巻き込まれ命を落とすという悲痛な事件も起こっています。

戸締まりをしっかりとすることや、夜間の一人歩きなども十分注意するとともに、友人、知人同士で相互に注意し合うことが、犯罪から身を守り事故を防ぐことにつながります。一人ひとりが、防犯意識を高く持つよう訴えます。

また、バイク、自転車等による交通事故の被害も増加し、死亡事故も発生しています。交通事故は他人事ではありません。不慮の事故に遭わないよう細心の注意を払ってください。

大学としても、これら危険な事態を受け、緊急対策として次のような取り組みを実施します。

- 女子学生全員へ防犯ブザーの配付
- 防犯、交通安全パンフレットの配付
- 事件、事故発生ハザードマップの配付
- 学生に関係する事件、事故事例のメール等による周知
- 大学構内の防犯カメラ増設、夜間照明の改善
- 警察、茨城県防犯協会との連携
- 学外の夜間照明環境改善に向けた地域へのはたらきかけ など

「自分だけは大丈夫」と考えず、事件・事故は皆さんのすぐ近くで起こることを自覚し、日頃から防犯や交通事故への危機感を持って行動してください。

◆ 第 11 回学生国際会議を開催

12月5日（土）・6日（日）、茨城大学図書館において、本学学生による第11回茨城大学学生国際会議が開催されました。本会議は、学生による学生のための国際会議として、茨城大学の大学院生が主体となって企画運営しているもので、2005年より毎年1回開催されています。今回は、“様々な人とのつながりや分野を越えたつながりから新たな可能性が生まれる”との期待をこめた「LINK」をテーマに、外部講師による講演のほか、学生等による学術発表がすべて英語で行われました。

本会議を主催し、オープニング・セレモニーの挨拶に立った学生実行委員長の松岡勇人さんは、今回の会議が参加者の LINK のきっかけになってほしいとの想いを話しました。招待講演に登壇した国立科学博物館の細矢剛氏は、菌類の生態について最新の研究結果を発表し、同じく登壇したボゴール農科大学の M Faiz Syuaib 博士は、アジア農学のサステナビリティのためには教育と研究の協力が重要であると語り、参加者から大きな拍手が送られました。

会議には、2日間で茨城大学の学生・留学生のほか、高校生を含む約80名が参加。クロージング・セレモニーでは、ポスターやオーラル・セッション等の各部門で優秀な発表に対して表彰が執り行われ、盛況のうちに幕を閉じました。



オーラル・セッション



優秀発表者への表彰

◆ キャンパス周辺自治会とともに町内一斉清掃

12月6日（日）早朝、周辺自治会が企画する年末一斉美化活動の一環として、約50名の学生・教職員が水戸キャンパス周辺での清掃活動に参加しました。

水戸キャンパスの周辺自治会である「堀原地区住民の会」などは、毎年冬に自治会内一斉美化清掃を行っており、同大からも学生や教職員が毎年ボランティアで清掃活動に参加しています。今年参加したのは茨城大学バスケットボール部の23名の学生と有志の教員・職員約30名。なかには4歳の子どもを連れた職員もおおり、和気あいあいとした中にも真剣に取り組む様子がうかがえました。

当日は冬らしい澄んだ空の下、防寒対策をした参加者たちが朝7時前に集合し、竹ぼうきを手に、3つのグループに分かれてキャンパス周辺を回りました。この時期に目立つのは黄色く染まったイチョウの落ち葉で、ほうきや熊手を使って集めると大きなゴミ袋はすぐにいっぱいになり、リヤカーを引いた職員が次々と集めていきました。

清掃は1時間程度で終了。集合場所に全員戻ってきてからは、学生たちに肉まんとホットドリンクが配られ、早朝からの作業を互いに労う姿が見られました。参加した教育学部の学生は、「普段歩いていても気にしなかったがよく見るとゴミが結構ある」と感想を述べました。



◆ 職員採用内定通知書交付式を実施

12月8日(火)、平成28年4月に採用予定の事務系職員、技術系職員採用内定者の採用内定通知書交付式を実施しました。

これは、採用内定者に対し、大学への理解を深めてもらい、かつ、採用内定者同士の相互交流を目的としたものです。

採用内定者は、袖山理事(総務・財務担当)から採用内定通知書を交付され、歓迎の挨拶を受けた後、現在の国立大学法人の置かれている状況や大学職員としての心構え等についての講話を受け、熱心に耳を傾けていました。



内定者への講話をする袖山理事

その後、三村学長、袖山理事、小新総務部長、秋葉人事課長出席のもと、先輩職員のほか、内定者と同年度の採用試験を受験し、先行して採用されている新採職員も加わり、自己紹介も兼ねつつ、和やかに懇談をしながら昼食を取り、午後からは、先輩職員等と大学職員の業務内容、職場の様子や雰囲気、社会人となるまでの準備等について懇談形式による質疑応答を行いました。

内定通知書交付式当初は緊張していた採用内定者もすっかりうち解け、職員達へ積極的に質問するなど、大学職員の仕事ぶりや職場について理解を深めることができた様子でした。



大学役職員及び先輩職員等と採用内定者の懇談・質疑応答

◆ 学長、事務局長がベトナム・ハノイを訪問 日越大学関連式典に参加

三村信男学長と袖山禎之理事・事務局長が、12月12日（土）～13日（日）にベトナム・ハノイを訪問し、ベトナム国家大学で開催された日越大学修士プログラム紹介式典に参加しました。

「日越大学」は、日本、ベトナム両政府の合意の下、日本の有力大学の参加・協力及び国際協力機構（JICA）の資金援助等により、ベトナム国家大学（VNU）傘下の大学として設立しようとするものです。まず、サステナビリティ学に関する大学院の6プログラム（修士課程）を2016年9月に開設し、その後順次拡大していく予定であり、式典では、プログラムの紹介及び各プログラムの日本側幹事校（東大、阪大、筑波大、横浜国大、早大、立命館大）とVNUとの協定書交換等が行われました。

6プログラムに続き、2017年度には「気候変動」修士課程プログラムが開設される予定で、茨城大学は同分野において積極的に協力する方針です。中心的な役割を果たすことも期待されていることから、式典に引き続いて、三村学長はじめ日本側関係者がVNUニャ総長、ハイ副総長らと会談し、気候変動プログラムのあり方等について意見交換を行いました。



協定書の交換



関係者の記念撮影

◆ 防災防火訓練を実施

12月15日（火）、茨城大学水戸キャンパスにおいて、防災防火訓練が実施されました。本訓練は、水戸キャンパスの学生及び教職員を対象に、急な災害時にも安全確保できるよう実施したものです。今回は、震度6強の地震が発生し共通教育棟で火災が発生したとの想定で、職員が自衛消防隊を設置し、学生等を避難場所へ誘導するとともに、建物の安全確認や消火活動の演習を行いました。

訓練では、水戸消防署員による指導のもと屋内消火栓を使用した消火訓練が行われたほか、消火器の模擬消火演習に多数の教職員や学生が参加しました。また、今回の訓練では初めて屋外トイレの設置演習も行われ、職員らが専用の設備を組み立てるとともに、非常時の給水方法や排水路を確認しました。



◆ 水戸市との共催でキャリアワーク・ライフ・バランス語るセミナー

12月15日(火)、茨城大学男女共同参画推進委員会と水戸市との共催により、「私のキャリアとワーク・ライフ・バランス」と題したセミナーを開催しました。

今回のセミナーでは、人文学部の清山玲教授をモデレーターとして、育児をしながら仕事をしている茨城県信用組合の黒さん、(株)ケースホールディングスの小池さん、水戸市役所の安島さんという女性3名が登壇し、それぞれの仕事や家庭への思い、現実を語りました。

「就職活動をするとき将来の家庭との両立をどの程度考えておけば良いのか」「自分はどんなパートナーと結婚するだろうか」「出産しても仕事を続けるべき」「夫は育児休暇をとったほうが良いか」といった、キャリアを考える上で向き合わなければならない課題に対し、3名の登壇者は、自らの辛い体験や家族のことなども踏まえて、率直な言葉で語りました。普段のキャリアセミナーではなかなか聞けない「本音」から、会場いっぱいの参加学生たちも、自分の20年後の姿をイメージしているようでした。



◆ 教員 2 名が科学研究費助成事業（科研費）審査員表彰

人文学部の葉倩瑋教授と工学部の小林薫教授が、独立行政法人日本学術振興会理事長より平成 27 年度科学研究費助成事業（科研費）の審査員表彰を受け、12 月 18 日（金）、表彰状と記念品が三村信男学長より手渡されました。

科研費の審査にあたっては、第 1 段審査（書面審査）と第 2 段審査（合議審査）の 2 段階のピアレビューが行われていますが、日本学術振興会では、その適正性・公正性を確保し、次年度の審査委員選考に反映させるため、審査の検証を行っているということです。平成 20 年度からは、その検証結果に基づき、有意義な審査意見を付した審査委員を選考して表彰しており、今年度は約 5,500 名の第 1 段審査委員の中から 189 名が選考され、本学の教員からは葉教授と小林教授の 2 名が選ばれました。



表彰状・記念品授与の様子

中央が小林薫人文学部教授、その右側が葉倩瑋人文学部教授

◆ 茨城大学美術家教員展をひたちなか市内で開催 新たな試みも

美術作家・音楽家として活躍しながら、茨城大学教育学部で芸術教育を担っている12名による作品展が、12月18日(金)～23日(水)、ひたちなか市の「ギャラリーESPACE」で開催されました。

この展覧会は、美術科教育の教員が中心となって毎年冬に行っているもので、今年は新たに音楽教育を担当している山口哲人准教授も加わり、「茨城大学美術科教員展+M」として、フルート三重奏の生演奏会も行いました。また、片口直樹准教授(油彩画)と横田将士講師(映像)は初めてのコラボレーション作品として、天井から吊るした布織物に映像を投影する幻想的なインスタレーションを披露しました。



会場の様子（設営時に撮影）

◆ 平成 28 年 三村信男学長年頭あいさつ

平成 28 年 1 月 6 日(水)、三村信男学長が教職員向けに年頭あいさつを行いました。あいさつの内容は以下の通りです。

2016 年を力強く飛躍する年に

新年、おめでとうございます。

皆様には、それぞれよい年をお迎えのことと思います。

2016 年の年頭に当たり、抱負を述べたいと思います。まず、昨年を振り返ると、本学にとって多くの面で進展がありました。大きな飛躍の年だったと言えます。大学改革では、各学部・研究科の組織改革案がほぼ固まるまで来ました。また、COC 事業の一環として「茨城学」をスタートさせ、COC+事業が採択されるなど地域連携面での進展、国際交流協定や英語教育の強化など大学教育のグローバル化でも進展がありました。広報活動の抜本的強化とも相まって、地域の方々から、茨城大学の姿が見えるようになったという声を聞くようになり、本学の社会的なビジビリティ(認知度)も上昇しています。

今年は、本学がさらに力強く飛躍する年にしたいと思います。キーワードは「地域にさらに深く根ざし、世界で輝く大学」の実現です。

そのために最も重要な取り組みは、教育改革の本格展開だと考えています。ディプロマ・ポリシーが示す教育目標は、一言で言えば「自力で未来を切り拓くたくましい茨大生」の育成です。そうした学生を育てる教育には、学生自らが考え、他人と議論し、問題を解決する経験が極めて重要です。今年は、アクティブ・ラーニング型の授業をさらに強化し、教室でのアクティブ・ラーニング、地域や企業での PBL とインターンシップ、海外での実践演習や留学などを活用し、学びのフィールドを大学から地域、世界に広げて、自立的でチャレンジ精神を持つ学生を育てていきたいと思っています。こうした教育改革をけん引する全学教育機構を 28 年度当初から立ち上げます。また、各学部・研究科の組織改組をこうした教育の転換と表裏一体で取り組みたいと思います。

世界で輝く大学を目指す上では、国際的な教育連携と研究成果の発信による大学のグローバル化を重視します。

私は、昨年 12 月にベトナムの首都ハノイを訪問し、日本とベトナムの協力で設置されるベトナム・日本大学(VJU)の紹介式典に参加しました。今年 9 月には、修士課程 6 プログラムがスタートしますが、本学は、来年開始予定の「気候変動プログラム」で中心的な役割を担当するように要請されています。アジア地域の持続可能な社会の構築に貢献するため、是非この新し

い国際大学の設立に協力していきたいと思ひます。また、今年4月に設置される理工学研究科量子線科学専攻では、高度な専門人材の育成と共にインパクトの高い研究成果の創出を目指します。優れた研究成果には、幅広い分野の裾野の広がりが必要であり、教員・研究者の研究環境の整備と研究成果の発信を強化したいと思ひます。

昨年は、テロが世界を覆い、世界経済の低迷や難民問題、異常気象の頻発など、まさに激動する時代に生きていることを感じさせられることが多くありました。その一方で、自動運転やロボットが生活の中に入ってきたことは、次の社会の出現を予感させます。世界の変化は激しく、先の見えにくい激動の時代になっていますが、だからこそ、大学の役割の重要性を自覚する必要があります。そのような時代を乗り越え未来を切り拓いていくのは、チャレンジ精神を持つ若い人材であり、大学の生み出す知の蓄積です。長い歴史や伝統に培われつつも価値観を見極める力をもつ必要もあります。「人材育成」と「知の創造と蓄積」という大学本来の役割を明確に自覚しつつ、夢のある魅力的な大学づくりを皆様と共に取り組んでいきたいと思ひます。それに向かって、ご協力をお願いいたします。

最後になりますが、教職員の皆様のご健勝とご活躍を祈念して、私の新春の挨拶とさせていただきます。皆様の意欲が十分に発揮され、それが茨城大学の力強い改革につながっていくことを期待しています。

◆ 仏漫画バンド・デシネ人気作家のアジア初の個展を学生の運営で開催

1月7日（木）～18日（月）、水戸キャンパス図書館展示室で、ベルギー生まれのバンド・デシネの作家ジョゼ・パロンド氏の作品を紹介する個展が開催されました。「バンド・デシネ」とは、フランス語圏の漫画を総称したもので、パロンド氏は1995年に初めての作品を出版、2015年現在で著作は39冊を数え、日本でも絵本が翻訳されています。今回の展覧会は、パロンド氏の個展としては、アジア圏で初めての展覧会であり、パロンド氏自身の書きおろしの作品解説も寄せられました。

この展覧会は、人文学部の専門演習科目「視覚表現論」の授業活動として、受講する学生15名が中心となって企画・運営を行いました。また、作品の翻訳作業も、教養科目のフランス語の授業の一環で学生たちが取り組みました。各授業を担当する人文学部の猪俣紀子准教授はバンド・デシネの研究を専門としており、パロンド氏の作品の翻訳も手がけています。展示空間のデザインや設営にあたっては、京都国際マンガミュージアムの元空間デザイン担当者の協力も得て、学生たちは本格的な指導を受けながら作業を進めてきました。受講した学生の一人は、「きちんとした手順で他人の作品を扱うことで、そのことの大変さや作品を見せるための工夫を知ることができた」と語っています。

展覧会の会場は、大きなタペストリーにプリントされた作品や、キャラクターを象ったパネルを散りばめ、音楽活動も行うパロンド氏につくった曲のBGMとともに、彼の作品の世界観が体感できる工夫がされていました。1月13日（水）には、学生によるギャラリートークが行われ、約15名の来場者が学生の解説に熱心に耳を傾けていました。



来場者に説明する学生（右）



展示された原画や直筆スケッチ



熱心に見入る来場者

◆ 附属中・小沼信行 主幹教諭、文部科学大臣優秀教職員表彰を受賞

茨城大学教育学部附属中学校の小沼 信行 主幹教諭が「平成27年度文部科学大臣優秀教職員」の表彰を受けました。

この表彰は、全国の国公私立学校の現職の教育職員で、学校教育における教育実践等に顕著な成果を挙げた者として、文部科学大臣が審査を行い決定されたものです。

小沼教諭は、平成23年4月に茨城大学教育学部附属中学校に着任。研究主任を3年間務め、研究、研修の推進役となりました。現在は主幹教諭・教務主任として、先の時代を見越した提案性の高い教育課程経営を中心になって実践し、各種研究会の講師や出前授業の授業者として研究実践の成果を広く発信しています。また、茨城県教育研究会理科教育研究部の事務局を担当し、県の理科教育研究の推進、理科教育の向上に尽力しています。

今回の文部科学大臣優秀教職員表彰は、小沼教諭のこれらの実績と優れた成果により、地域や全国の教育の発展に寄与したことが評価されたものです。



【小沼教諭のコメント】

この度は思いがけず受賞の栄に浴し、誠に光栄に思います。これも日頃からご支援くださっている関係者の皆様、そして熱心に学ぶ生徒の皆さんのお陰と感謝しております。

今後、一層、教育課程運営等の職務や研究に邁進し、学校のみならず地域の教育力の向上に微力ながら貢献していく所存です。引き続きご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

◆ OB・OGの若手記者招き地方新聞について語るシンポジウム

1月13日(水)、「新聞マルシェシンポジウム 茨大出身の若手記者が語る 地方新聞の現場、未来への想い」と題したイベントを、茨城新聞社との共催で実施し、学生や市民など約70名が来場しました。

「新聞マルシェ」は、近県や沖縄などの地方新聞が閲覧できる図書館内のスペースで、茨城大学COC事業の一環として、茨城新聞社の協力のもと2014年に開設されました。開設以来第3回目となった今回のシンポジウムでは、本学を卒業後各地の地方新聞局で活躍している20代の記者3名が招かれ、新聞の未来や仕事の模様などをパネルディスカッション形式で語りました。

それに先立ち基調講演を行った茨城新聞社の小田部卓社長は、「地方紙は、地方の声の代弁者として発足し、発展してきた。地方紙が元気になれば地方も元気になる」と話しました。

パネルディスカッションでは、人文学部4年生の後藤結有さんがモデレーターを務め、いずれも同大卒業生である茨城新聞社の小原瑛平さん、デーリー東北新聞社の田沢奈々さん、秋田魁新報社の藤田祥子さんが登壇し、人文学部の長田華子准教授がコメントレーターを務めました。地域の発展と地方紙の役割について聞かれた各氏は、「見過ごされている問題も丁寧に取材をし、報道することで、それらが地域の政策決定に影響を与えることもある」(小原さん)、「地方の経済活動を世界の動きと結びつける視点も大切」(田沢さん)、「政策などへの市民の不満の声に耳を傾けて代弁するとともに、多様な見方をきちんと伝えることで、問題提起をしていく」(藤田さん)などと語りました。その他、台頭するネットメディアをどう見るか、地域やメディアの環境が変化する中でどのようなキャリアイメージをもっているか、といった質問に対し、それぞれの登壇者から率直な意見が聞かれました。長田准教授は、「人口減少時代に突入している現在、どのようにして地域を維持させ、安定させていくかが今後の課題。未来を占ううえで、記者の使命は大きく、今後も鋭い記事を期待したい」と三記者にエールを送りました。

シンポジウムの開始前には、プレ企画として学生を中心とした参加者による「まわしよみ新聞」ワークショップが開かれました。これは、参加者が新聞を回し読みし、各自が注目した記事を切り抜いて、その記事を選んだ理由を発表し「壁新聞」を作るというもの。前述の小原記者もこれに参加し、「学生の新聞の読み方を見ることができて今後の参考になった」と述べました。



茨城新聞社 小田部社長



パネルディスカッション

◆ タイ、ベトナムとの大学間合同ワークショップを開催

1月18日（月）、「2016 理論・計算化学に関する日本－タイ－ベトナム合同ワークショップ」が茨城大学で開催され、3か国の大学教員らが学術交流を行いました。日本では茨城大学、横浜市立大学、北海道大学の6名が、タイからはチェンマイ大学理学部の2名、ベトナムからは茨城大学と大学間交流協定を締結しているベトナム国家大学ハノイ科学大学の1名が参加しました。参加者は、有機分子や酵素の理論的研究や、分子に関する理論研究を行うための最新の計算手法の開発、理論研究に基づいた材料設計の研究成果についてそれぞれ講演を行いました。

ワークショップには大学の教員、大学院生、学部生等も参加し、国内外の研究成果に熱心に耳を傾けました。横浜市立大学・立川仁典教授とともに本ワークショップを主催した森聖治 理学部教授（国際戦略室長）は、「日本、タイ、ベトナムの間で、今後この分野に関する共同研究が進展することが期待されている。茨城大学は、アジア・太平洋諸国の大学との国際教育連携と国際共同研究の成果発信が拡大することを目標に掲げている。今後、東南アジア諸国との共同研究およびそれに基づいた大学院生の交流ができる種を見つけていきたい。」と述べました。



講演の様子



ワークショップの参加者

◆ 大学改革キャッチフレーズを学内募集で多数の応募

本学で、大学改革に対する学内外の関心・理解の向上を図り、改革の趣旨や方向性を端的に示すキャッチフレーズを本学学生・教職員を対象に公募し、このほど優秀作品が決定しました。

「茨城大学改革キャッチフレーズ」は、昨年（平成 27 年）秋にホームページなどで募集。11 月に行われた学園祭でも応募受付ブースを出すなど、幅広く応募を呼びかけた。改革全体、教育、研究、社会連携・地域貢献、グローバル化、ガバナンス改革にカテゴリを分けて公募し、募集要項においてそれぞれの趣旨、概要を示すことで、応募者に関心・理解を促しました。

その結果、集まった作品は合計で 137 点。大学執行部および若手教職員による一次審査で優秀候補作品を絞ったのち、候補作品の作成者である学生・教職員を集めてブラッシュアップのミーティングを行うなど、審査プロセスでも参加意識を高める工夫を施しました。

改革全体のキャッチフレーズの最優秀作品に選ばれたのは、労務課職員の山口潤哉さんによる「つぎの茨城大学へ 地域に根ざし、世界へ挑戦する大学」。また、教育のカテゴリでは、工学部の学生である加藤翔太さんの「見つけよう 世界に響く 君の個性」が選ばれました。

1 月 28 日（木）には、最優秀・優秀作品に選ばれた学生・教職員への表彰式も行われ、記念撮影や懇談会を実施しました。表彰式で三村信男学長は、「大学改革は執行部だけでなく、学生や職員のみなさんを含む大学全体で取り組んでいくものにしていきたいという思いから、キャッチフレーズを広く公募することにした。こんなにたくさんの応募をいただけてありがたい。ただ『改革をする』ということだけでなく、きちんとその中身を伝えていくものになりたい。今回の最優秀・優秀作品として選ばれたフレーズは、その推進力となってくれると思う。」と述べました。

最優秀作品・優秀作品に選ばれたキャッチフレーズは、大学のホームページにて公開しており、今後これらのキャッチフレーズを広報でも活用していく予定です。



表彰式での記念写真撮影



教育カテゴリで最優秀作品に選ばれた工学部の加藤さん（左は三村学長）